

木下正男氏 （有）木下ソーイング会長

しじみ、ハマグリ、マジックライナー、花びらメロー、サシコ。これらすべて木下ソーイングのオリジナル加工技術から生まれた縫製の「商品」である。通常、縫製加工業者は元請けから依頼されて縫製加工するだけだが、木下ソーイングは違う。

1990年代まではタオルメーカーの下請けとして仕事はどんどん舞い込んできたが、バブル経済崩壊後はぐっと仕事量が減った。ここに危機感を抱いた木下正男氏は、タオル縫製の「ヘム屋」ではなく縫製の「加工屋」として商品の提案もおこなうことで新たな市場を開拓し、また大手の縫製加工業者ができないニッチなニーズに対応することで生き残りを図り、いまでは全国に顧客を持つ。



木下正男氏



きのした・まさお ☆ 1946年9月、愛媛県喜多郡内子町に8男1女の末っ子として誕生。内子町立大瀬小学校、内子町立大瀬中学校を卒業後、集団就職で大阪に出る。運送会社で5年働き、その間18歳で自動車免許を取得してドライバーとしてのキャリアを積む。帰郷途中に立ち寄った今治の風景に魅了されてそのまま居座り、中忠（株）に就職。その後、タクシー会社のドライバー兼無線業務をへて、1987年に木下急配を創設し起業。1994年新たに（有）木下ソーイングを設立し、いまでは商品開発もおこなう「提案型」縫製加工業者として成長しつづけている。

1. 幼少期

内子町のガキ大将

木下正男氏は、1946年9月21日、愛媛県喜多郡内子町に8男1女の第8男として誕生した。父親の福太郎氏と母親のマシヨ氏は内子町出身で、地元で農業を営んでいた。裕福な家庭ではなかったが、家族みんなで協力し合いながら戦中・戦後の貧しい時代を切り抜けてきた。末っ子の木下氏は、兄姉たちにたいそう可愛がってもらったが、とくに長兄とは30歳の年の開きがあり、長兄が父親で実の父親が祖父のような不思議な感覚で育った。

木下氏は、片道徒歩30分のところにあった内子町立大瀬小学校に進学し、小学校時代は末っ子らしく天真爛漫でイタズラ好きの少年だった。近所の友だちから、「悪いことやったらあいつに聞け」と言われるほどの悪ガキだった。こんなエピソードがある。学校からの帰り道、あまりにもお腹が空いていたので、畑に実っていたスイカを割っておやつ代わりにして食べた。ただ、しばらくバシないように知恵を働かせて割った断面を下にして帰った。こうしたイタズラが過ぎて父親にはよく怒られ、母親には苦勞をかけた。母親が毎晩のように近所の家に頭を下げて回っていたことが、幼いながら自責の念にかられ木下氏の苦い思い出として残っている。しかし、ただのイタズラ少年ではなかった。イタズラは過ぎても悪ガキと言われても、弱い者を絶対にいじめなかった。むしろ守ってやるくらいの頼もしい田舎のガキ大将であった。

木下氏は、1959年3月に大瀬小学校を卒業し、4月から内子町立大瀬中学校に入学した。中学校へは片道40分ほどかかり小学校より少し遠い場所にあった。当時は友だちと「三角ベース」という野球に似た子供の遊びをよくした。通常、野球はダイヤモンド型の4つのベースがあるが、三角ベースは文字どおり3つのベースしかなく、その辺に落ちている木をバットに見立て、あとはボールさえ


あれば狭い敷地でも十分に楽しめた。当時はボールも貴重だったので野球用のボールではなく、近所から軟式テニス用の柔らかいボールを拾ってきて用を足した。子供なりに頭を絞り工夫を凝らしながら、貧しかったけれども何をするにも「助け合いの精神」で、友だちや家族と協力して豊かな時間を過ごした。


2. 独立までのキャリア

帰郷途中に立ち寄った今治の風景に感動し、そのまま就職

1962年、日本はすでに高度経済成長期にあり、都会では多くの雇用が生み出された。木下氏は、同年3月に大瀬中学校を卒業し、大阪に集団就職した。入社したのは運送会社だった。そのため、大阪で18歳のときに普通免許を取得し、その後大型1種・2種免許も取得してドライバーとしてのキャリアを積んだ。

大阪の運送会社で5年ほど務めたのち、大阪から岡山を經由し汽車で8時間くらいの道のりで内子町へ帰郷する予定だったが、汽車賃が足りずに途中の今治で下車した。興味半分で汽車を降りた木下氏だったが、たまたま降り立った今治では、ちょうど川沿いに染色された色とりどりのタオルが天日干しされており、「なんてキレイなんだろう。風に吹かれてタオルがふわっと舞い上がって絵に描いたような風景だな」と感動して足を止めた。そして、ここでしばらく居座ろうと決めて、職を見つけることにした。

タオルに魅せられたから、就職先に選んだのはタオル関係の会社だった。老舗タオルメーカーの中忠（株）に入社し、約6年間におよんで外回りの運転手として働いた。このときに出会ったのが、農業の傍ら副業として自宅でタオル縫製をおこなう技術者たちである。タオルは地域内で分業によって生産されており、ヘム縫いなどの仕上工程は多くの場合近隣に住む農家、とくに女性に外注されて

いた。タオルメーカーで製織されたタオル生地はヘム縫いを請け負う各農家に配送され、縫製されたタオルは再びタオルメーカーに返送される。木下氏は、この運搬作業を担当した。そして、出入りしていたヘム縫いの技術者のひとりが川原敏子氏  であった。川原氏は、のちに木下氏によって設立される木下ソーイングの縫製請負人となる技術者である。

中忠では、将来の伴侶にも出会えた。1972年、同社で働いていた伊予郡中山町（現・伊予市中山町）出身で3つ年下の多津子氏と26歳のときに結婚した。1975年に長男・誠氏、1976年に次男・^{まさみ}政実氏、1978年に三男・昭氏が誕生し、3人の子宝にも恵まれた。現在、3人の息子たちは木下ソーイングで木下氏のもとで働いている。

中忠で経験を積んだあと、運転好きが高じて（有）立花タクシーに就職し、ドライバー兼無線業務を担当した。当時今治では、タクシー業界は過当競争にあった。そこで業界の合理化を図るために合併の話が浮上し、5社が合同することになった。木下氏は代表のひとりに選ばれたが、元々別会社だった5社を一つの組織にまとめるにはかなり苦労した。既得権益をめぐって相互に調整がつかず、結局は木下氏が代表を退くことで事を納めた。



多津子氏と正男氏（インタビュー時撮影）

タクシーのドライバーとして約6年間のキャリアを積んだのち、サラリーマンとしての最後の勤務は、（株）来島どっくでの、やはりドライバーの仕事であった。この頃、夫婦おなじ趣味を持った方がいいということで、毎週土曜になると多津子氏と一緒に夜釣りに出かけるようになった。子どもが誕生すると、子どもたちも連れて行った。趣味を兼ねていたが、

瀬戸内名物の鯛の他にタコやアワビなどが獲れたので、それを持ち帰り朝食や夕食の食材として家計の足しにした。「アワビは海のなかをシューと泳ぐんですよ。面白い発見でしたね。釣りをしていると何もかも忘れて無心になれる。疲れがとれてストレス解消になるんですよ。」夜釣りは木下氏にとって家族との協働作業であり、またリフレッシュの機会でもあった。夜釣りは、起業後に環境が変わっても夫婦の趣味としてしばらくつづき、毎週土曜の夜になると家族一緒に海に出かけた。

大阪からの帰途、ふと立ち寄った今治で「女房ももらえたし、たくさんの人に可愛がってもらって助けてもらって」、木下氏にとって今治は「一番居心地のいい場所」となった。そして、この土地でいよいよ起業するに運びとなる。（次号につづく）

